

伝統絵蠟燭の研究 I

- 歴史と製造法を中心に -

Studies of Japanese Traditional E-ROUSOKU I
- Its History, Manufacturing Technique, and Use -

写真学科

内 藤 郁 夫

Ikuo Naito

Department of Photography

Abstract

Shonai district (Tsuruoka and Sakata cities), Aizuwakamatsu city, and Nagaoka city are well known as production places of Japanese traditional picture drawn candles, so-called "E-ROUSOKUs". Now a day, because only five craft men produce the E-ROUSOKU by traditional method, it is afraid to lose the technology. I studied its history, manufacturing technique, and uses. They were developed until the middle of 18th century in Shonai district. The technique of the production passed from Aizuwakamatsu city to Nagaoka city. Etsuke-shi's, painters, drew typical pictures on the candle surface after Gojiru coating. And then, the candle surface was over-coated by breached wax. The E-ROUSOKUs were used chiefly for offerings of feudal lord, souvenirs, and Buddhist services in Edo-era.

1. 緒言

蠟燭は停電への備えや仏壇の灯明と、現在その利用が大変限られている。しかし、蠟燭の淡い光は、疲れた我々の生活に潤いを与え、落ち着きや安らぎを演出する重要な要素でもある。この中でも、蠟燭表面に美しい絵を描いた絵蠟燭を灯すと、格別な雰囲気が出される。最近、多くの蠟燭店で色鮮やかな絵蠟燭が販売されている。その多くが鮮やかなアクリル絵具で描かれるかプリント柄であり、昔ながらの呉汁と泥絵具で描かれる蠟燭はまれである。

和蠟燭は多くの研究者により、蠟絞や伝統的蠟燭製造が研究されている。一方、絵蠟燭については会津若松の製造法しか報告されておらず¹⁾、現在全国

でも伝統的絵蠟燭の製造業者は著しく少ない。絵蠟燭の研究は殆ど無く、多くの疑問がある。絵蠟燭の起源、製法・原料、絵柄、中国蠟燭の影響は、何故西日本では生産されなかったのか等である。現在、会津若松市(三業者)・長岡市(一業者)・酒田市と鶴岡市(山形県庄内地方、二業者、庄内地方では絵蠟燭を花紋燭という)で伝統的絵蠟燭が手書きで生産されている。これらの業者に直接面会し、絵蠟燭の調査を行った。また、関連する博物館の収集品も調査した。本報告では伝統的絵蠟燭に限定してその歴史・製造法と利用法を報告する。絵柄については次報で報告予定である。

2. 絵蠟燭の歴史

会津若松御用蠟燭商(ホシバンロウソク、安永元(1771)年創業との事)に中国製と伝わる碇型絵蠟燭が2本残っている(図1)。この蠟燭は、日本の碇

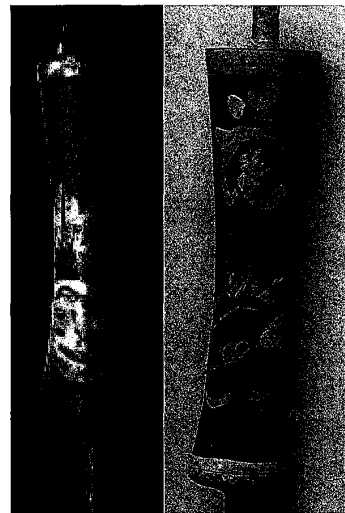


図1. ホシバンロウソクに残された中国蠟燭(左)と天理参考館の台湾蠟燭(右)

型蠟燭とは異なり、中心部が細い。江戸末期または明治初期のものとの事で、シンボライズされた牡丹の様な花が描かれている。これと絵の描き方の似た蠟燭が天理参考館に収蔵されている(図1)。両者とも竹串に刺さったままである。後者も入手情報が不明であるが、台湾蠟燭といわれている。もし中国から絵蠟燭製造の技術が伝わったとすると、長崎やその他の地方でも生産されていたはずである。しかし、江戸時代の絵蠟燭産地は酒田と鶴岡・会津若松・長岡に限られており、中国との関係は不明である。

(**荘内地方**)酒田での絵蠟燭の最も古い記録は、鶴岡大庄屋宇治家の文書(『宇治文書』)に記載された酒田丁子屋の「御用看板御免願」(宝暦13(1763)年)である²⁾。松井寿鶴斎の『東国旅行談』(天明7(1776)年)の酒田の項にも絵蠟燭が紹介されている(図2)³⁾。「花蠟燭 同所本町二丁目何かしの家にて製する蠟燭の事也 今三ヶの津にても製する繪らうそく又ハ花蠟燭共いふ物也 當国當所のさらし蠟ハ日本第一の名産にして 至て色白く雪の如し らうそくニするに燈し油を用ひすして 能光る 流れ候事なく たとへ流落ても物に付事なし 彼潔白なる蠟燭に五色の繪の具をもつて花鳥山水木花実和漢の人物美女等を蒸かき 其上を又清白なる上品のさらし蠟をかけてミかきたれハ さながら水晶の内に繪を書きたるがやう火を燈す時ハ玲滝として件の繪すき通り 美にして且艶也 故に公侯大人も是をもてあらそひ給ふとかや 因て諸国の旅人は是を求めて土産とす 其あきのふ家ハ門前誠に市をなして賑か也」(以上図2)。さらに「此邊より庄内の事 追々書のせ候 乍去他国より見物一通りにて書留候事故 まま違候所相見候 花もん蠟燭等も酒田ハ元に候へども此双紙以前より鶴岡皆川屋妙を得し事に御座候 其外ともに右におなじく候」と続く。この他、『佐竹家文書』(酒田大庄屋)には寛政年間(1789～1800年)酒田の茶人三丁目(佐竹)弥右衛門が先代宗匠(宗偏流岡村宗恕)供養のため江戸へ絵蠟燭を送った記録や文化5年弥右衛門が水谷義閑に蠟燭と焼麩を送った記録⁴⁾や、文化年間(1804～

1817年)酒田妙法寺住職が京都日聞上人に花紋燭を送った記録⁴⁾等がある。京より絵師を招き、盛んに絵蠟燭を生産していたと伝えられる。『東国旅行談』には酒田で絵蠟燭製造が始まった様子が書かれているがその詳細は不明であり、まず鶴岡で始まったと記載された文献もある⁵⁾。

一方、鶴岡史には「享保年間(1716～1736年)に皆川重兵衛が絵蠟燭を始めて製造したと伝えられる」と記載されている⁶⁾。皆川家伝承では、「天明の頃(1781～1788年)、鶴岡藩主酒井候は重兵衛(二代目)が製造した細工蠟燭(花活筒と伝えられる)を將軍家に献上する途中破損した。江戸の職人には修理が出来ず、皆川重兵衛が江戸に出向いて11代將軍家斉(1787～1841年)の面前で修理して献上した。家斉いたく感心し、『日本一家』と賞賛されて錦衣一着を賜わった」と伝承されている⁶⁾。天明6(1786)年の『宇治文書』には皆川重兵衛の「御用」の文字使用の願状が転記されている⁷⁾。願状には「筆蠟燭等乍恐内々献上相納」とある。一方、『宇治文書町奉行所例帳』には「花紋燭・筆蠟燭等・蠟花生等之御用被仰付」(天明6(1786)年)と記載されている²⁾。前述の功績を持って願い出たものと解釈されている。この結果、二人扶持を賜り看板への藩主酒井家家紋の使用が許された⁸⁾。また、筆蠟燭や蠟花生等の細工蠟燭の製造には高度の技術を必要とする。これより庄内地方では1700年代中期までには絵蠟燭製造が始まったと考えるのが順当であろう。この他、天明5(1782)年・寛政元(1793)年・寛政11(1803)年の『竹内家出納記』には花紋燭購入の記載がある。この他、『辺見家文書』や『二口文書』(いずれも19世紀前半)等鶴岡には種々の古文書に花紋燭の文字が散見できる⁹⁾。これより、1782年以前より絵蠟燭が一般に使用された事が明らかである。また、『辺見家文書』には酒井家の「進上物目録上書」の写しが残されており、その中には文政6(1822)年と天保8(1837)年に田安家に贈った「蠟御花活」がある。到道博物館には「戊辰之役(1868年)十月五日荘内ニ於テ求メラレシモノ荘内蠟燭 皆川重製」と箱書された筆蠟燭が現存する。これより、江戸時代末期

までは細工蠟燭も製造されていた事が明らかである。しかし、明治以降は不明である。

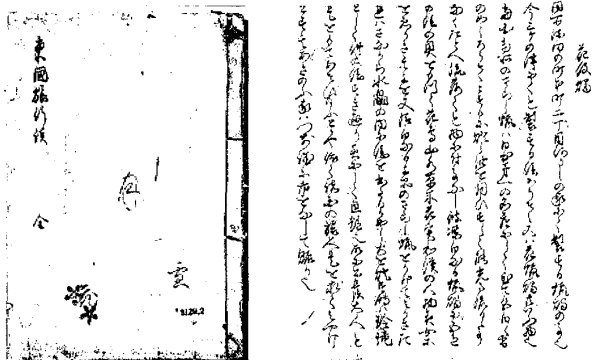


図2. 東国旅行談、表紙と花紋燭の項の一部

(会津若松) 一般的な伝承では、蒲生氏郷が会津移封の際(天正18(1590)年)に漆塗の蒔き絵職人を近江より伴い、まず漆工芸が成立した。この影響で絵蠟燭づくりが始まったと云われている¹⁰⁾。文献上絵蠟燭が登場するのは、『若松風俗帳』(文化4(1807)年)¹¹⁾や『新編会津風土記』(文化6(1809)年)¹²⁾であり、会津の特産品として記載されている。『若松風俗帳』では、「絵蠟燭 色白き上蠟にて掛け堅め 更に其周りへ草木花鳥魚龍を画き 或は筆箒のかたちへ掛 是を色能彩色して其上蠟にて留る 又画の高低肉置して蒔絵のごとくなるもあり 佛前等へ是を燈せば 大に火の光を添ひ一体の面透通り明らかに見ゆる様一興あり」と記載されている。前半は日本画タイプの絵蠟燭の記載であり、以降は細工蠟燭や蒔絵蠟燭についての記載である。『新編会津風土記』では「若松大町の土産(産物の事)」の項に「画蠟燭 此町に斎藤八郎兵衛と云蠟燭掛あり 近頃頃此品を巧み出せしより今多く広まれり 筆幹竹筍のかたち真にせまり 宮媛の清翫とするに足れり」と細工蠟燭について記載されている。これより、会津では庄内地方に少し遅れて絵蠟燭技術が完成したと推測した。また、E. S. Morse は明治25(1882)年東京で3種類の絵蠟燭(日本画タイプの絵蠟燭・筆蠟燭・蒔絵蠟燭)を購入している¹³⁾。蒔絵蠟燭は会津若松独特のものである。もし同時に購入したとすると

会津若松のものとは推論でき、明治中期頃(ca.1990年)までは細工蠟燭や蒔絵蠟燭も製造されていた事が明らかである。

江戸時代末期には、風刺画(子供遊び)が江戸で流行した¹⁴⁾。子供が二組(尊王派と佐幕派)に別れ、幼い天皇(明治)を奪い合う絵である。これらの絵には蠟燭柄の着物を着た子供も登場し、会津藩を表わす。一部絵蠟燭柄の着物を着た子供も描かれていた(図3)。この事は江戸においても会津福島で絵蠟燭が製造されていた事が広く認知されていた事の査証である。



図3. 子供遊び(町田美術館所蔵)

(越後長岡) 絵蠟燭に関する江戸時代や明治時代の資料はまだ見つからない。越後の一部が会津藩の支藩であり、新潟県北魚沼郡小出町と小千谷市には会津藩の陣屋もあった。これが越後で絵蠟燭作りの始まった理由とされている¹⁵⁾。伝統絵柄には牡丹や菊と瓶や架台が描かれている(花籠紋)。花の下の瓶と架台は会津で忘れられた絵柄であり、図案からも会津から技術が伝わったと推論した。

3. 伝統絵蠟燭製造

絵蠟燭製造は蠟掛と絵付とに分業されていた。現在も会津若松で一軒、長岡には絵付師が活躍している。以下には会津若松の製造法¹⁾を中心に紹介する。図4に会津若松と鶴岡の絵蠟燭製造過程

を示す。

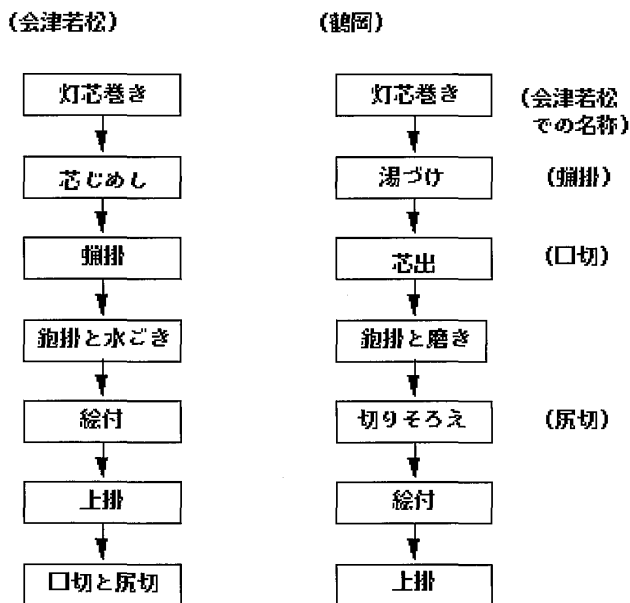


図4. 絵蠟燭製造過程を図に示す。

(蠟)『東国旅行談』³⁾では蠟を「至て色白く雪の如し(中略)さながら水晶の内に繪を書きたるがやう」と表現している。『若松風俗帳』¹¹⁾でも「色白き上蠟にて掛け堅め(中略)大に火の光を添ひ一体の画透通り明らかに見ゆる」と蠟の白さや透明度を表現している。会津や新潟での聞き取り調査でも、土用晒した漆蠟(砕いた生蠟を冷水で冷やししながら夏の太陽に2~3日晒す¹⁶⁾)は白く硬いとのものであった¹⁷⁾。この蠟を蠟燭店では生産者や中間業者から購入していた。

庄内藩においても漆蠟は主要な産物の一つで、雑税の対象として徴集されていた¹⁸⁾。しかし、時代が下ると代納(役銭)が多くなる。明治3(1870)年の鶴岡の『商戸職業取調帳』には蠟燭屋が24軒と記載され¹⁹⁾、多量の蠟を使用したと推論できる。これらの蠟がどこから移入されたかは不明である。『加茂港史』²⁰⁾(加茂:現在鶴岡市に編入)には江戸時代後期の加茂湊への移入品や加茂に寄港した北前船の積荷についても記載している。享和3(1803)年の加茂長沢家の『棚卸帳』には生蠟が登場する。この蠟は漆か蠟かは不明であるが、越後・秋田・酒田からは蠟が移出されたと解釈され

ており、漆蠟と考えるのが妥当であろう。文政6(1823)年の長沢家の『御客帳』の末尾には取引商品に蠟(大坂晒²¹⁾)の記載がある。『鶴岡市史』²²⁾には明治25年の鶴岡(荒町河岸)への移入品に下関からの生蠟の記録(2,768貫=10.4t)がある(取扱貨物調書では3114貫=11.7t)。下関からの移入であるので、蠟燭と推論される。また『(山形県)勸業年報』(明治15(1882)年)²³⁾によると加茂港と酒田港の入荷品割合はほぼ等しく、酒田でも同様に蠟が移入されたと想像できる。これより、北前船の寄港地である庄内地方では、江戸時代末期には大半の蠟が蠟燭に置き換わったと推論した。この結果は一部の蠟燭店での聞き取り結果(「明治頃に漆蠟より西日本産蠟燭に置き代わった」²⁴⁾)と一致する。致道博物館犬塚氏によれば、一部の蠟燭店では「越沢(旧山形県西田川郡温海町)に漆蠟の買出に行った」との話聞いたとの事で、時代については不明である。

会津藩では漆蠟生産が主要な年貢として制度化されて多量に生産されていた²⁵⁾。戊辰戦争によりこの制度が崩壊したとは言え、明治時代初期から蠟燭が使用されていたとは考え難い。岩手県一戸町の記録では、大正時代の漆蠟の移出先に喜多方(福島県)と共に長岡(新潟県)も記載されている²⁶⁾。興味深い資料として会津喜多方大榎商店の『書拔帳』・『人名帳』・『発信簿』²⁷⁾(大正・昭和初期)が現存し、漆蠟(主に岩手県二戸町産)と蠟燭(主に久留米産)の入荷割合が明らかである。大正時代の『書拔帳』にはまだ蠟燭は登場せず、この時代までは会津若松の絵蠟燭は岩手産の漆晒蠟も使用して製造されたと推論した。また、僅かながら漆の晒蠟が1965年頃まで福島県只見地方²⁸⁾や新潟県村上市で生産されていた。一部の蠟燭店では上掛にこれが使用されていた²⁹⁾。現在蠟燭も使用されるが、パラフィン蠟が主でありその割合は不明である。

(灯芯)いずれの伝統的蠟燭店でも、作業は灯芯作りから始る。竹串(ニットの編棒の様に先端が尖っている)に短冊形の和紙を巻き、灯芯草(蘭草の

一種で、藺草より丈が長い。)の芯を巻き付けて製作する。芯は切れやいので、鶴岡では少し湿らせて巻き付ける。大きい蠟燭のためには木材の棒も使用する。多くの和蠟燭産地では、巻いた灯芯に真綿を巻いて押さえる。しかし、いずれの絵蠟燭産地でも真綿を使用しない³⁰⁾。江戸時代、会津若松では土浦藩の灯芯と蠟燭とを物々交換したとの事であった。会津若松では、巻かれた灯芯の先端を削って整形する。

(芯じめしと先付け) 灯芯を竹串より外して 10 本束ね、上半分下半分と溶けた生蠟につけて灯芯を固める。芯じめしの蠟が乾ききる前に竹(蠟掛)串を灯芯に刺す。芯先は少し削って成形しておく。芯じめした灯芯はサイカチの液(現在は石鹼水)に漬け、芯を出し易くする。鶴岡にはない作業である。

(蠟掛) 磁器製火鉢にのせた兜鉢で蠟を融き、左手で蠟をすくいながら、右手に持った灯芯(蠟燭)に付けていく。蠟掛後の蠟燭は蠟掛台に立て掛けて充分乾燥する。この操作を繰り返して太い蠟燭も制作する。鶴岡では「湯付(練り付)」と言い、銅釜で融解した蠟にまず串に刺した灯芯を縦向きにかき混ぜながら蠟を付け、次いで横向きに回しながら蠟を付ける。上が太く、下が細くなる様に調整する³¹⁾。

(匏掛と水ごき) 乾燥した蠟燭は匏掛をして整形する。次いで水の入った鍋で蠟を溶かし、蠟の付いた手で水を掬い蠟燭の表面をこする。蠟と水を別々の兜鉢で準備し、水ごきを行う事もある。蠟燭を白くし、表面を滑らかにするための作業である。鶴岡では、芯出してから匏掛を行う。さらに孟宗竹の革で蠟燭表面を磨き(粗磨と仕上げ磨、2回)、艶をだす³¹⁾。

(絵付) 絵付けは、蠟燭掛けと分業されていた。また、江戸時代には、京より絵師を招き絵の華麗

さを競っていたとも、足軽等の内職であったとも云われている³²⁾。蠟には水溶性絵具が乗らないので、蠟燭に唾を付けて描いていたとも云われている³²⁾。その後、竹串上で整形した蠟燭の表面に呉汁(一握りの大豆を一昼夜水に漬けた後、摺潰してガーゼ等で漉したもの)を塗って一夜乾燥し、その上に細い筆を使用して泥絵具で絵を描いていた^{1,33)}。絵を失敗した場合、サイカチの液や灰汁(現在は石鹼水を使用する)に浸けて絵を落とし、白蠟燭として使用する²⁹⁾。現在、庄内の一業者(アクリル絵具も使用)と長岡の絵付け師は、まだこの手法で絵付を行っている。一方、鶴岡では呉汁を塗って一夜乾燥し、アクリル絵具も使用して絵が描かれる。

大正末期(1924年)には転写法が鶴岡市の伽羅屋により開発され³⁴⁾、伝統絵柄(牡丹3輪と花籠・御所車と布)の絵蠟燭が現在も生産されている。一部布が御所車の横に黒の線で丸まった糸屑の様に描いた図もある。現在も御所車の絵蠟燭が生産されている。一方油性アクリル絵具を使用する場合、直接蠟燭に絵が描かれている。

明治5(1872)年頃の酒田での絵付代は五匁蠟燭(約18g)で六文半である³⁵⁾。会津若松での聞取りでは、絵付代は絵蠟燭価格の約一割とのことであった¹⁶⁾。これより当時の絵蠟燭の値段が想像できる。

(絵具) 鶴岡には(八日町村)大戸正貞氏用の『花紋燭手本』(明治20(1887)年)が現存する。これには「■(黄壁?、■:判読不能)・松蘿・紅蘿・青乱・素影・玉■(筒?)」と記載した筆も描かれていた。図5に『花紋燭手本』のページ(p.4)を示す³⁶⁾。松蘿の筆の筒には緑が、紅蘿には赤が、青乱には青が着色されていた。玉■の文字は薄茶色で表記されており、素影の筆には墨線が描かれていた。手本の図案は主に黒・緑・赤・青・黄の5色で描かれており、黒(素影)・緑(松蘿)・赤(紅蘿)・青(青乱)・黄(■)・茶(玉■)と推論した³⁷⁾。

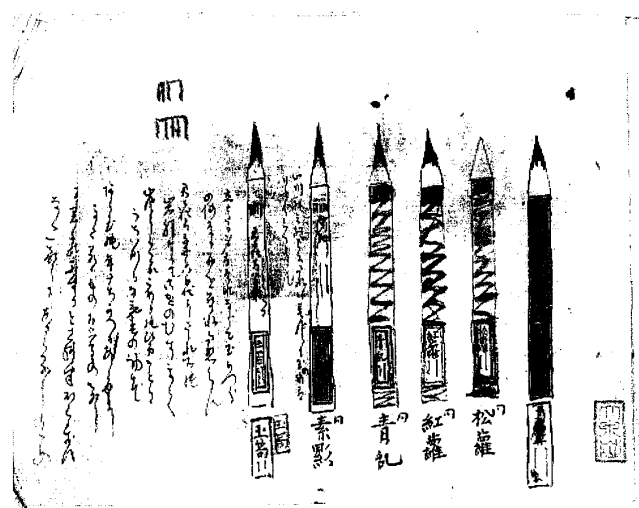


図5. 花紋燭手本の絵筆の図

一方『会津若松市史』³⁸⁾には「赤黄緑紫など」と記載されていたが、絵具名は不明である。粉碎した泥絵具を膠に溶いて使用したと記載した資料が多い^{1,32)}。会津民族館には明治以降のものと思われる絵付台と絵具皿が残されている。皿は赤・緑・黄しかないが、藍を含め4本の絵具粉碎用棒がある。しかし、絵具名と成分は不明である。絵具は混ぜずに使用すると、鮮やかな絵が描けるとの事であった。ホシバンロウソク店では植物染料を使用したとの事であったが、使用時期については不明である¹⁶⁾。現在、伝統的絵蠟燭製造にも油

性アクリル絵具が主に使用される。一方、長岡の絵蠟燭には水彩絵具(呉汁を塗って)が使用されている。

(上掛)『東国旅行談』³⁾や『若松風俗帳』¹¹⁾で明らかな様に、絵を描いた上に晒蠟を上掛けして絵蠟燭が製造されていた。会津若松では上掛けを「蠟くぐし」ともいい、絵を描いた蠟燭(竹串に付いた蠟燭)を「じょだん」という箱に入れて火鉢で余熱し、次いで溶解した蠟の入った、陶製の深い筒中の溶解した蠟に浸けて行なわれる^{1,33)}。静かにゆっくり竹串を引き上げる事が重要との事であった。上掛蠟の温度が高い場合は絵が流れ、低い場合は上掛蠟が白濁する。部屋を締めきって一定温度で作業しなければならず、部屋や蠟の温度管理も大変微妙である。鶴岡では、銅製の鍋に入れて上掛を行い絵蠟燭が完成する。特に鍋の温度の調整と平均に上掛けする事が困難との事で、釜は弱火で過熱し表面の艶を出す³¹⁾。現在もこれらの伝統的絵蠟燭産地では上掛けを行っている。一方、現在各地で生産される新しいものには上掛がない。

(口切と尻切)さらに蠟燭を磨き、蠟燭の先を削り灯芯を出す。会津若松では「先取り」ともいう。出来上がった蠟燭は竹串を外し、サイズを揃えて

表1. 絵蠟燭の特徴

産地	タイプ	絵柄・形	上掛け・蠟	購入者	使用目的	現代の生産状況
会津	日本画タイプ	牡丹と菊(古くは甕と台を付けた)	有り、漆蠟を使用、明治以降一部檀蠟も使用	武家階級明治以降一般化	仏事・土産、明治以降慶事も	蠟燭店と絵師が絵付を行う
	細工蠟燭	筆・巻物・筍	有り、漆蠟	藩	将軍家等への献上品	なし。筆・巻物蠟燭は再現
	蒔絵タイプ	不明	有り	不明	不明	なし
鶴岡	日本画タイプ	御所車	有り。江戸末期より檀蠟も使用	武家・豪農・豪商	仏事	蠟燭店が絵付。プリント柄蠟燭
	細工蠟燭	筆蠟燭	不明	藩・一般	土産?	なし
		花活筒蠟燭	不明	藩	献上品	なし
長岡	日本画タイプ	牡丹・菊・甕台、金銀の箔	有り、1965年頃まで漆蠟も	不明	仏事	絵師と蠟燭店
他地方	日本画タイプ	季節の花棒型が多い	なし、季節の花	観光客	土産	蠟燭店・プリント柄蠟燭もある

切断する。

4. 絵蠟燭の使われ方

表1に絵蠟燭の生産状況や利用法をまとめた。会津藩は、絵蠟燭を天皇家や将軍家への献上品や贈り物として使用していたと伝承されている。『東国旅行談』³⁾には「旅人は是を求めてみやけとす」と記載されており、その絵柄³⁶⁾も絵蠟燭を仏前に供えるだけのものとは考え難い。江戸時代後期、酒田には絵蠟燭を贈った記録が散見される⁴⁾。皆川重兵衛の伝承も、鶴岡藩が絵蠟燭を将軍家へ献上したときの話である。天保11(1840)年の鶴岡『竹内家文書(江戸日記)』にも酒井家(藩主)が将軍家に絵蠟燭を贈った記録が多々登場する。この他鶴岡『辺見家文書』等多数の史料より、絵蠟燭が献上品や贈答品および土産物として利用されていた事が明らかである。

鶴岡には多くの葬儀の記録文書がある。『竹内八郎右衛門出納記』に天明5(1785)年、寛政元年(1789)年、寛政11(1799)年の絵蠟燭購入の記載がある。とくに寛政元年の記録では、丁子屋(酒田)より花紋燭5箱を金1両で、20挺を金2歩で購入したとの記録がある。前後の記載より、不幸での入用のためと解釈される。この他、『不幸諸事控』と『二口文書・大福帳』(文化8(1808)年)、『二口文書・賻尊帳』(文政8(1818)年)、『大圓妙鏡大姉賻尊帳』(天保4(1833)年)等である。これより、葬儀の折り武家階級だけでなく一般人(豪商や豪農)も絵蠟燭を使用したことが明らかである。秋野葬具店主(鶴岡市本町二丁目)によると、浄土真宗を除き不幸の場合香典と共に絵蠟燭を持参する。富樫蠟燭店での聞き取り調査では、明治初期には全蠟燭生産量の約40-50%が絵蠟燭との事であった²⁴⁾。この風習も鶴岡での絵蠟燭生産割合の多い理由であろう。

会津若松ホシバンロウソクでの聞き取り調査では、江戸時代は武家の葬儀でのみ絵蠟燭が使用されたとの事である。絵蠟燭が高価な事も、利用が限られていた理由であろう。最近でも、「花のない冬期絵蠟燭を飾ると仏壇に花を備えなくてよい」と

いわれており、葬儀に絵蠟燭を贈るといった特別の習俗はない³⁹⁾。聞き取り調査では、明治時代(1869~1911年)頃の絵蠟燭の生産割合は全蠟燭生産量の約10%で、盆まで絵蠟燭を生産し以降は白蠟燭を生産したとの回答であった。明治初期には蠟燭屋が80店あったとの事で、江戸期には多量の蠟燭と絵蠟燭が生産され、江戸に出荷されたと推論できる。

新潟でも、古い蠟燭商(さがみ屋)から聞き取り調査を行った。江戸時代の事はよく解らないとの事であった。新潟県中越地方では、曹洞宗を除き仏事に絵蠟燭が良く使用される。葬儀では白蠟燭に施主の紋と贈り主の名前の入ったものが使用され、葬儀の日に点灯する。大きさは百匁・百五十匁(それぞれ375g,563g)が最も多い。法要には絵蠟燭も使用される。主に長岡市付近、上越線沿線の地域、折尾、見附市、三条市では良く使用される。他地域での利用は少なくなってきた。この他、仏壇には十匁二十匁(それぞれ38g,75g)位の絵蠟燭を飾りに使用する。お正月やお盆用等には入れ替えるが、余り点火せず装飾用使用する。これも絵蠟燭を古くから使用した理由であろう。

これら絵蠟燭産地では、「白蠟燭は神社に、絵蠟燭は仏壇に」とも云われてきた。しかし、絵柄には吉兆文様も多く華やかなため、明治以降絵蠟燭は祝の宴にも使用された様である。現在も伝統的絵蠟燭産地では、仏事で主に使用されている。この他庄内地方では、黒川能(山形県出羽山神社)や出羽三山開山等の特別行事にも使用される。表1に伝統的な絵蠟燭の絵柄・上掛け・使用状況および現在の生産状況などをまとめた。現在多くの蠟燭店ではパラフィン蠟で蠟燭が生産され、アクリル絵具で絵が描かれている。伝統的絵蠟燭産地でも大半が土産用であるので、四季の草花が主に描かれ、伝統的絵柄の蠟燭生産量は特に少ない。最後に、絵蠟燭は我々の誇るべき伝統文化である。しかしその技術者は大変高齢化しており、伝統的な商店でも維持が困難な状況である。早急な技術の保存対策が望まれる次第である。

5. まとめ

会津若松市・庄内地方(鶴岡市と酒市田)・長岡市は伝統的絵蠟燭産地として知られている。その歴史・伝統的絵柄・製造における特徴・利用法を調査した。18世紀中頃、絵蠟燭は庄内地方で発明され、会津若松では庄内地方に少し遅れて生産が始まったと推論した。会津若松からの技術の伝播により、長岡でも絵蠟燭の生産が開始されたと推論した。しかし、資料が少なく何時生産を開始したかは不明である。

漆の晒蠟は白く硬い蠟である。透明度も高い。これと呉汁(大豆蛋白)の利用が絵蠟燭製造には重要な要素である。庄内地方は焼麩の産地であり鶴岡は染色業(藍染と友禅)が盛んであった。防染剤として使用される呉汁が、何時どのように絵蠟燭製造に使用され始めたかは不明である。また、庄内における絵蠟燭製造は一子相伝との事で、製造業者も少なく(現在2蠟燭店のみ)古い製造方法が充分調査できたとは言い難い。

これらの地域では、仏事に絵蠟燭が使用される。これが伝統的絵蠟燭の残った理由であろう。現在はまだ、中国蠟燭の影響等不明な点が多い。現在、各地の蠟燭店で絵蠟燭が生産されている。伝統的産地でも、アクリル絵具が使用され、四季の草花が主に描かれている。これらには上掛けがない。上掛けも伝統的絵蠟燭の特徴である。

最後に、絵蠟燭は我々の誇るべき伝統文化である。しかしその技術者は大変高齢化しており、伝統的な業者でも維持が困難な状況である。呉汁を利用した古典的絵付の出来る技術者は2-3名しかいない。このため、可能な限り昔の技術の解明を研究目的とした。しかし、早急な技術の保存対策と新しい絵蠟燭の利用法の確立が最も重要な課題である。

謝辞

九州福岡に在住する小生が、2~3度蠟燭産地を訪問する事で絵蠟燭の調査ができた訳でない。福島県、山形県、新潟県の多くの伝統的蠟燭業者・熟練技術者から多くの貴重なお話と資料を戴

いた。また、致道博物館犬塚幹士氏、鶴岡市立郷土資料館秋保良氏、福島県立博物館佐々木長生氏、会津若松市立図書館野口信一氏と成田陽子氏、会津民族館山口正衛氏には多くの貴重な史料を戴き、多数の貴重な御教示を戴いた。有田陶磁器文化館鈴田由紀夫氏には見本帳の甕について多くの御教示を戴いた。天理参考館佐々木久育氏には台湾蠟燭の写真の提供を戴いた。町田市立博物館畠山豊氏には風刺画「子供遊び」の写真掲載の許可を戴いた。本学デザイン学科車政弘教授には古い中国蠟燭についての御教示を戴いた。ナカガワ胡粉絵具KK藤岡雅人氏には岩絵具について多くの御教示をいただいた。これら多くの先輩諸氏御指導御鞭撻のおかげで小論まで漕ぎ着けた。ここに皆様に深謝する次第です。

文献

- 1) 山口弥一郎：山口弥一郎選集、第8巻日本の固有生活を求めて、世界文庫、(1976)、pp.115-162.
- 2) 鶴岡市史編纂会編、鶴岡市史資料篇庄内史資料集11、鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書上巻、鶴岡市、(1982)、27、(資料集の全文を記載する)「宝暦13年未4月 酒田丁子屋甚右門と申者前々より(仮名2字の合字)御用花紋燭等被仰付候二付中田七郎兵衛在役中被申立候而御用之看板被下置候」
- 3) 酒田市史編纂会編、改訂版酒田市史(上巻)、酒田市、(1987)844;(松井寿岳斎の紹介や『東国旅行談』の前段が同資料に紹介されている。)
- 4) 酒田市史編纂会編：改訂版酒田市史(上巻)、酒田市、(1987)864-865(佐竹家文書)
- 5) 『酒田市史』では鶴岡より伝わると記載されている。酒田市史編纂会編：改訂版酒田市史(上巻)、酒田市、(1987)856.
- 6) 伊藤多三郎監修：鶴岡市史、上巻、鶴岡市役所(1974)654-655;庄内人名辞典刊行会編集出版、庄内人名辞典(1976)612.
- 7) 鶴岡市史編纂会編：鶴岡市史資料篇庄内史資

- 料集11、鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書上巻、鶴岡市、88、1982(資料集の全文を記載する)「蠟燭屋御用之二文字御免願 乍恐以書 付奉願上候 拙者儀兼而蠟燭家業仕罷在候所 御在城之節 従御次向御用花紋燭度々被仰付指上其上筆蠟燭等 乍恐内々献上相納 冥加至極難有仕合奉存候 此上恐多奉存候へ共何卒以御威光 御用之二文字蠟燭看板被 仰付被下置候ハ重々難有仕合可奉存候 午十月 皆川重兵衛 肝煎惣兵衛殿 願之通被仰付候」
- 8) 荘内春秋昭和11年11月8日号
- 9) 『辺見家文書』、『二口文書』、その他『不幸所持控』等(いずれも鶴岡市資料館所蔵)
- 10) たとえば、七日町三・四青年会主催：七日町のいまむかし＝市民寺子屋・親子ふるさと教室＝(資料)、(1983)10；滝沢洋之、野口信一著、会津若松史22●民俗編2諸職 職人の世界、会津若松市、(2002)pp. 53.
- 11) 若松風俗帳；庄司吉之助編：会津風土記・風俗帳・巻三文化風俗帳、吉川弘文館(1980)38、(吉川弘文館の書籍では原典の文字竄を判読不能としている。)
- 12) 新編会津風土記、巻之十五、陸奥国若松之四、大町の項；丸井佳寿子監修：新編会津風土記、第一巻、歴史春秋出版(1999)210.
- 13) 小西四郎、田辺悟編、モースコレクション日本編モースの見た日本、小学館、(1989)、105。(写真左より日本画タイプ、筆蠟燭、蒔絵蠟燭)
- 14) 町田市立博物館編：幕末の風刺画戊辰戦争を中心に、同博物館出版、(1995)。
- 15) 長岡市さがみ屋(古い蠟燭商)での聞き取り。
- 16) 会津若松の御用蠟燭商ホシバンロウソクでの聞き取り。
- 17) 新潟小池蠟燭での聞き取り。
- 18) 鶴岡市史編纂会編、荘内史資料集4大泉記年、鶴岡市、(1978) p.12：犬塚幹士、荘内のくらしと民具、財団法人致道博物館(1993)96-97.
- 19) 鶴岡史編纂会、荘内史要覧、鶴岡市(1985)258.明治3(1870)年の『商戸職業取調帳』には蠟燭屋が24軒と記載されている。
- 20) 工藤定雄・秋野庸太郎編、加茂港史、加茂郷土史編纂会(1966)63-97.
- 21) 以下の文献によると、蠟の晒し法は京都で発明され大坂で発展したと記載されている。大坂晒は大阪または同じ方法で晒した蠟と推論した。(内子町町並保存対策課産業振興課編集出版、ハゼノ木今昔物語、(1993)70.)
- 22) 大瀬欽哉他編、鶴岡市史下巻、えびすや書店、(1975)、576.
- 23) 山形懸農商課編集出版、(山形懸)勸業年報、(明治15(1884)年版)
- 24) 富樫雄治氏聞き取り。
- 25) たとえば、長倉 保：会津藩における蠟専売制の成立とその展開、神戸大学文学会研究、Vol.8、121-162、(1955)；会津若松史出版委員会編：会津若松史第3巻、同会出版、(1965)、pp.40-62；山口弥一郎：山口弥一郎選集、第8巻日本の固有生活を求めて、世界文庫、(1976)、pp.116-120.
- 26) 一戸町教育委員会編および出版、「一戸町文化財調査報告第22集岩手県北地方の漆蠟」、(1966)、35.
- 27) 工藤紘一、会津喜多方大榭商店、民具マンズリー、31、(7)、18-24(1988)。
- 28) 奥会津書房：奥会津だより、只見川電源流域振興協議会、15号、4、(2002)。
- 29) ホシバンロウソクや小池蠟燭での聞き取り
- 30) 一部鶴岡で真綿を使用した記載もあるが(山形県教育委員会編、山形県の諸職(伝統的手職)、山形県教育委員会編(1987)、pp.209-212.)、富樫蠟燭や酒田平野蠟燭での聞き取り調査では使用しない。
- 31) (鶴岡での絵蠟燭作り)山形県教育委員会編、山形県の諸職(伝統的手職)、山形県教育委員会編(1987)、pp.209-212.
- 32) 会津若松市ホシバンロウソク店、鶴岡市富樫絵蠟燭店、中村蠟燭店での聞き取り調査
- 33) 佐々木長生「会津の絵蠟燭縁起談」民具マンズリー、16(12)、1-9(1984)。

- 34) 鶴岡市伽羅屋が 1923 年に特許申請し、認められた。
- 35) 酒田市史編纂会編：改訂版酒田市史(上巻)、酒田市、(1987),616.
- 36) 内藤郁夫、昇 愛子、「伝統絵蠟燭の研究II-伝統的絵柄の調査-」九州産業大学芸術学会研究報告38,181-192 (2007).
- 37) ナカガワ胡粉絵具 K K 藤岡雅人氏からの私信「■■■：筆の文字と下の文字とを合わせて考慮すると黄壁と読める。黄壁は染色用語で黄蘗(きはだ)の事であり、緑味のある黄色を表す。松蘿は狩野派が使用したモスグリーンと推論した。青乱は青藍の誤字と推察され、青を表す。他は不明である」(2002).
- 38) 会津若松史出版委員会編：会津若松市史第3巻、同会出版、(1965),40-62.
- 39) 福島県立博物館佐々木長生氏私信(2006)